

【全国納税貯蓄組合連合会優秀賞】

税金は誰かの「ありがとう」かもしれない

大分市立大東中学校

三年 得丸 里支

私たちが毎日過ごしているこの街。きれいな公園、安心して通える学校、困ったときには頼れる病院。それらの多くは、税金によって支えられている。そう聞いたとき、私は「税金ってただ取られるもの」だと思っていた自分が、少し恥ずかしくなった。

例えば、ある日風邪をひいて病院に行った。保険証を出して、少しの負担で診てもらえた。その時私は、「あ、これも税金のおかげなんだ」と気づいた。誰かが納めた税金が、私の健康を守ってくれている。それって、すごく優しい仕組みだと思う。知らない誰かが、自分のために支えてくれているなんて、ちょっと感動した。

税金は、誰かの「困った」を支える力になる。災害が起きたとき、復旧のために使われるお金も税金。高齢者の介護や子どもたちの教育にも使われている。つまり、税金は社会の中で、「支え合う気持ち」を形にしたものなのだ。誰かが困っているとき、直接手を差し伸べることはできなくても、税金を通してその人を助けることができる。それって、すごくあたたかいことだと思う。

そして、自分が税金を納める側になつたとき、それは「誰かのためにできること」になる。自分の働いたお金の一部が、誰かの命や生活を守るために使われる。そう考えると、税金ってただの制度じゃなくて、社会の中でつながる「ありがとう」の形なのかもしれない。誰かの「助かった」という気持ちが、見えないところで自分につながっている。そう思うと、税金を納めることに誇りを持てる気がする。

これから先、私は税金を「取られるもの」ではなく、「支え合うもの」として見ていくたい。その気持ちが、少しでも誰かの安心につながるなら、私は喜んで税金を納めたいと思う。税金は、社会をつなぐ優しさのかたまり。そう思えるようになつたことが、私にとって大きな気づきだった。

そしていつか、自分が納めた税金が、誰かの「大丈夫」に変わる瞬間があるなら。それはきっと、目には見えなくても、心のどこかでつながっている優しさだと思う。